

「締約国は、児童の生存及び発達を可能な最大限の範囲において確保する……」といった具合に、「発達」という言葉が繰り返し出でくる。「発達」が子どもにとって大切な概念であることが表れたが、前田晶子准教授『日本教育史』によると、今、この概念が大きく揺れている。

「発達」という言葉が子ども間の競争を助長している、といふ批判が出てきています」

「子どもの発達を見る指標として、知能指数などの様々なテス

**鹿大の
KAGOSHIMA
UNIVERSITY チカラ**

教育学部

発達論

前田 晶子 准教授(39)



「発達」という概念は、そもそも社会の発展に寄与できる人間を育てることを想定して使われ、そうでない人間は疎外されてしまう」といった議論が起き、「別の言葉や価値観に置き換えるべきだ」と唱える研究者もいるという。

目標すべき価値観や概念が揺らいだままでは、教育そのものがその々で揺れ動き、場当たり的になってしまう。「未来を見据えた目的や理想、価値観がないのは非常に危険。戦前

トが行われてきた。その結果が子どもに応じた教育を生かされるというより、序列化の指標に使われてきた、という指摘もそ

「子の成長」歴史から探る

幕末の小児科医・堀内素堂が記した一般向けの小児科書「保嬰瑣言」。長年紛失したとされていた

は徳之島出身の教育者・山下健治が「子どもの研究を通して人間の存在そのものを根本から考えよう」との立場を打ち出した。こうした視点があったにもかかわらず、発達という概念は時代の移り変わりのなかで矮小化

「ともか育」とは何か見ぬ直
必要がありそうだ。
「はじめであれ、学級崩壊で
あれ、問題の根本にある『子ど
もをもつてゐたかららしか』と
いう課題に、歴史研究から答へ
られれば」

や戦中、西洋の近代化の概念を批判するなかで、教師たちが國家主義に加担していくました」批判する前に、発達という言葉の生い立ちをもう一度考えてみよう。前田准教授は歴史の中に、目指す価値観を再び辙くヒントを探る。

子がいまにも活動を始める状態で、草が芽を出し雨風に打たれて、がらんがらん形を変えていく。そういうものだと解説しています」。生まれた子の約半分が死に、「小児、水の泡の江」と言われるほどだった江末期、西洋医学に触れた壇内は子どもの強い生命力を見つめようになっていた。

され、ともすれば競争につながるような概念になってしまつた面があるので、と前田准教授は感じている。

脳科学が発展した現在、子どもの発達が必ずしも右肩上がりの一直線ではないと分かつてき

た。

例えば生後3～4ヶ月の乳児には動物の顔を見分けたり外国語の音を聞き分けたり、うつぶ